

ているばかりなり。保安隊も見て見ぬふりである。宿舍まで行軍、宿舍内は住民が自由に出入り出来、時計、その他貴重品を見れば奪い、手出しはもちろん、口出しも出来ない有様なり。

九月二十日ごろ武装解除。街の中心部へ移動。共同便所、防空壕の汚物を揚子江へ捨てに行く。作業の往復には石や物を投げられた。毎日、この作業を続けた。

四、五日の行軍にて湖北省黃岡県團風花園保に移動、軍行路建設工事に従事。民家の土間に藁を敷いて暮らし一冬を過ごす。

二十一年五月、復員のため移動、九江より無蓋車にて上海へ。特別市政府三階に待機、六月博多上陸、復員。

(後記、昭和十五年宜昌作戦と比べて)

南京を出てからの制空権の無い悲しさ。終戦までの一年余はもぐら生活だった。弾薬、食糧等思うほど輸送も進まず。

衡陽では反転途中、六連隊長に空襲の合い間を見て申告をすませます。大隊砲小隊を訪ね一別以来の戦友に会い喜びをともしにするも、大川が退避が遅れて敵機の機銃掃射

で戦死。患者後送中いかに多数の兵士がコレラで死んだことだろう。手当ての仕様がなない。

易俗河のブンドウ豆。河北省ではハスリ貝その他カエル、ヘビ、スッポンなどを食べた。四月ごろより暖かくなり、軍服の裏地、毛布その他下着まで売って命をつないで来た。もう一度冬を過ごしていたらどうなっていただろうか……。

浙贛大作戦体験記

大阪府 北口 功 忠

私は昭和十五年九月五日、鳥取中部第四十七部隊第九中隊に入営す。同年兵は直ぐ北支に派遣され、私は初年兵教育のため、同年兵より約一年遅れて、初年兵とともに昭和十六年三月十五日宇品港を出港、三月十九日に塘沽港に上陸、三月十七日河北省石門に到着、三月二十四日河北省鉅鹿県鉅鹿到着、部隊全員と合流す。

我々の毎日の勤務は、肅正討伐である。日本側につく

北支住民の情報により部落に八路軍進入の報告を受け、便衣隊の服装に替えて敵の少ない時は小銃、または私は拳銃を持って夜間攻撃に出動する。また昼の戦闘では、私の一一年式軽機関銃は中隊の一番に使用されるのだ。中隊長の「軽機前へ」の命令で一番先頭に出て敵のチェッコ機関銃との戦いである。鉄カブトの上や横を敵の銃弾がパチパチと通っていく。私も何回か鉄カブトに穴を掘ったことであろう。

また望楼の勤務がある。「シーサン開門」と言って物を持って来る者の中には、敵兵の便衣もいる。一度望楼を攻撃され、戦友が多く手榴弾で負傷死をしたこともあった。このような戦闘を繰り返しながら地区の電話線道路の確保と勤務を続けるうち、昭和十七年四月二十四日「第三号作戦」に参加、昭和十七年五月「浙贛作戦」に参加、第七十一師団と改称。

鉅鹿を出発、我々鳥取連隊の者は足が丈夫とあって山岳戦に回され、完全軍装で一一年式軽機関銃を肩に担ぎ、上ったり下ったり、また山砲の手助けもし、とても口では言えない疲労の連続である。

中隊長の「小休止」の命令で斜面に横になり何十分ほど眠ったか、目を覚ますと雨が降っている。完全軍装の上に雨のため、背のうが重くなっている。

突然ウワウワとの声に、山頂を見れば、どの部隊か知らないが突撃を敢行している。大きな作戦ともなれば、休んでいる部隊、肉弾戦をしている部隊等いろいろなことがあるなあとと思う。

「出発」の命令でまた追撃戦の続行である。ふと先方を見ると部落がある。中隊長より野営の準備をするよう指示があり、重い背のうを下ろして野営にかかる。

戦友はあちこちと物を探しに行く。私は機銃のため武器の手入れにかかる。戦友が帰ってきた。卵、砂糖、菜っ葉などいろいろと持ち帰る。さあ食事ができた。一番先にみそ汁を吸う。

菜っ葉をつまんでかんだ。「あ、苦い」。非常に苦い。これでは味噌汁も吸うこともできない。それもそのはずタバコの葉であった。朝になった。ご飯を炊いた水は池の水で二、三体の死体が浮かんでいる。

戦争というものは人間の神経を麻痺させるものかと思

う。さあ出発である。我々の任務は東鎮の飛行場攻撃である。これは米英機発着を阻止する目的である。私の肩はもう赤く腫れ上がっている。軽機が重い。支那服を裂いて肩当てにして進撃する。土饅頭があちこちにある。これは墓だそうだ。土饅頭の上に軽機を乗せ引き鉄を引く。

腹が減ってくるが食べ物もカンパンのみ、口の中にはうりこむ。追撃戦のため、口の中はからからだ。カンパンは団子となつてのどを通らず、また小便はできるが、大便をしていると皆に遅れてしまう。そのため進撃中にしてしまうのでとても臭い。

いよいよ目の前に東鎮の飛行場が見えてきた。砲撃の音、敵のチェッコ式機関銃の豆をいるような音、来る所まで来てしまった。川の岸まで到着した。すでに大隊の部隊が決死の渡河戦を行っているが、まだ先方の岸にいた者はなく、途中で全員戦死。川の流れは真っ赤に染まり、絵具を流したようになっていた。

大隊長から我が大隊長に対し渡河の命令が下る。井上隊長は我々に対して「皆の命を自分にくれ」と悲痛な声

で言う。私は「白タスキ」を十字に巻き付け、一二年式機関銃を横に抱えて工兵の用意をしてくれた船に乗る。敵は我々に向かって激しい攻撃を加えてくる。

強力な友軍の援護射撃のもとに船は出る。私の機銃は敵のチェッコ機銃を目標に捕えた。連続に打ちまくって、敵のチェッコを沈黙させ、ついに敵前上陸を敢行した。そして敵を飛行場外まで退却させた。わが中隊は夜間の戦闘に備えて川岸まで後退し、攻撃の準備にかかる。夜がきた。思った通り敵兵はわが軍が少ないとみたか、攻撃を始めてきた。

ア리가這うような攻撃である。友軍から照明弾が打ち上げられた。私は敵兵に向かって連続射撃に切り替え、敵兵のうめき声を聞きながら打ちまくった。ふと目の前に影が浮かんだと思った瞬間、ドーンという音を聞いたのが最後、私は意識を失い、気がついた時には、後方の野戦病院であった。

顔面、右上肢、右大腿部が手榴弾破片創である。

一二中隊一個中隊の犠牲で大隊本部全部渡河を完了して飛行場は陥落した。

かくしてこの作戦は終了し、我が部隊は満州関東軍に編入となり、その後「沖繩」「南方面」「千島方面」と部隊はばらばらとなり、終戦を迎えたのである。

遼行

東京部 山崎純夫

大東亞戦争末期の湘桂作戦は、中国奥地の米空軍基地の覆滅と、中国大陸と南方を陸路で結ぶことを目的とした作戦であった。

湘桂作戦が始まって三か月余、ようやく兵の疲労度が目に見えてきた。それに、食糧、衣類、弾薬の欠乏、このままでは漢口はおろか桂林、柳州まで到着することもおぼつかない。広州から少しずつ作戦のための諸材料が後送され、兵の疲労も癒えてきた。

思い出せば前線基地の江門を出発し、要衝の地、三埠を抜いて待機すること三カ月、ついに次の目的地、梧州への攻撃命令が出た。

梧州は古くから物資の集散地であり、また軍事上の要衝の地でもあった。梧州で西江と桂江が合流し、滔々たる大河となり、下って広州近くで珠江となり、南支那海に注ぐ中国で三番目の大河となる。

梧州への一番乗りを命令されたのは我が中隊の属する井上大隊であり、この上もない名營のことであった。三埠を出発してから関平、新興、鬱南と小競合いの末、敵を撃破し、ひたひたと一路梧州へと追った。広東のデルタ地帯と異なり鬱蒼たる原始林の中を進み、湧水は生のまま飲めるほどに澄んでいた。

一城をほおむると一口にいうが、その前に密偵、将校斥候、忍者部隊、威力偵察等々の工作があり、初めて攻撃開始となる。また、突然敵と遭遇することもあり、丘の上から狙撃されることもある。

昭和十九年九月二十日、ついに部隊の先頭は西江を見下ろす峠の上に立ったのである。

鳳兵団により梧州は既に占領されたという情報が伝わってきた。一番乗りの夢も消え去り疲労がどっとでた。梧州入城式も儂い夢となった。